

《4月12日（金）講義 エコミュージアムと持続可能な観光 要旨》

講師：京都外国語大学 国際貢献学部

グローバル観光学科 吉兼秀夫教授

冒頭

先生の自己紹介：奈良明日香村在住 モノにはそれぞれエピソードがあり大切である！

1. 多様で複合化する観光期待

- ・観光客の目的は、見学観光から、体験、知的欲求の満足、暮らすように旅するなど、社会の変化に伴い熟度も増しており、ますます多様で複合化する期待に対応していくためには、「みる・する・しる・ひたる」それぞれの分野で活躍する観光人材が求められる。

2. 観光における「図と地」論

- ・ピラミッドや法隆寺など旧来からの名所型観光を「図」、生活文化や路地裏の佇まいなどの価値創造型観光を「地」と定義し、これまでは背景として脇役に思われた「地」に関心を持つ観光が広がり、その風景そのものを主役とすることが求められる。
- ・これは、観光客にとって地域全体を味わう観光として楽しい異日常体験につながり、人を介することでリピートを誘発する。一方その地域にとっても、快適な地の保全と創造に資することで、賛同を得られることにつながる。
- ・「図」の観光とは客席に座って素晴らしいお芝居を見るようなもので、用意するのは絶品である。一方、「地」の観光は地域全体を素晴らしい舞台と見立てて観光客本人が役者を気取るような観光で、ここで用意するものは素晴らしい環境とワクワクする台本である。
- ・「地」の観光は満足の源泉と言えるが、やはり「図」の観光が来訪のモチベーションとなる。したがって、来訪を求めるためには「地」の図化（ブランド化）が必要となる。

3. 「地」の保全と創造を進める エコミュージアム

- ・暮らし（地）に誇りを持つこと = 参考になる活動としてエコミュージアムがある。エコミュージアムは、GH リビエールが発想したエコロジーとミュージアムの造語で、地域社会の内発的、持続的な発展に寄与することを目的に、住民の参加により環境と人間の活動を探る活動（＝まるごと博物館）と定義づけられる。
- ・宝探しをした全ての素材に価値があり、それらを一体として捉え、地域の記憶の井戸を掘ることで新しい文化の水脈にあたれば、次々に新しい文化の創造につながり、地域全体が暮らしの文化の大学になっていく。
- ・エコミュージアムを例えるなら、ジグソーパズルと伝言ゲームに言い換えられる。  
空間の博物館として、各素材を並べてみないと絵は分からず、一つ欠けても完成しない。  
また、時間の博物館として、前の人の情報を正しく伝えないと伝わらない。
- ・エコミュージアムの目的は、「自文化の自分化」である。（以上、議事録担当：塩見）